

子育て支援活動に参加する子育てを終えた女性の世代性

—子育て経験の成熟のプロセスに焦点を当てて—

GH091011：山下桂子

指導教員：吉田ゆり教授

問題

近年、少子化対策の一端として地域子育て支援拠点事業が発足した(厚生労働省, 2007)。子育て中の親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安・悩みを相談できる場を提供することが目的である。しかし現状には、各世代の生涯発達過程が「育てる一育てられる」という同時進行の関係発達がある(鯨岡, 2002)にもかかわらず、地域としての機能が十分でないことが指摘されている(厚生労働省, 2003)。それに対し、「世代間や良年齢児童との交流の継続的な取り組みの実施」の取り組みの一つに“子育てサポーター”(厚生労働省, 2007)が配置されている。これまで育児不安に対する子育て支援の有効性は多々研究されている(例えば塚崎・山形・無藤, 2007)が、いずれもサポートを受ける側の影響が多く、支援を行う者が子育て支援をどのように考え、何を得ようとしているのか調査した研究は散見されるのみである。

また、E.H.エリクソン(1950)は成人期の発達課題に世代性を提唱している。彼によると世代性とは、「次の世代を確立させ、導くことへの関心」(1950)、さらに「更なる同一性の開発にかかわる一種の自己一生殖も含めて、新しい存在や新しい製作物や新しい概念を生み出すこと」(1997)と定義されている。世代性についてMcAdams(1985)は、次世代に対する関心や関与、何かを生み出し支え維持する行為すべてをつなぎ、物語ることが人生に一貫性と目的と意味とを与えることを見出している。このことから西山(2010)は、過去の事実は変えられなくとも、物語ること/語りなおすことで、ものの見方を変えることができれば、現在や未来を自分の力で切り開いていくことが可能になることが示されている。さらに世代間で互いに世話や激励、導きを求め合う関係が成熟性とされ(E.H.エリクソン, 1950)、その過程の中で、子育てを終えた女性が自身の精神的健康の意味で社会や他者へ向かい(西田, 2000)、その活動を通して自己を問い直すことが示唆されている(難波, 2007)。従って子育てを終えた女性

である子育てサポーターの世代性を追うことでE.H.エリクソン(1950)の言う本来の意味での世代性を検証することができるのではないだろうか。

目的

以上より本研究では、子育て支援活動に参加する子育てを終えた女性の世代性について子育て経験の成熟のプロセスに焦点を当て、以下の仮説を検証することを目的とした。まず、過去の子育て経験の特にネガティブな経験を活かして活動に参加していること(仮説1)、それにより社会とのつながりをもとうとしていること(仮説2)、活動を通して過去の子育て経験がふりかえられ、受容されるプロセスがあること(仮説3)とした。

方法

研究協力者 子育て支援活動に参加している子育てを終えた女性(保育士などの資格無)で、研究協力の同意を得た3名を対象とした。平均年齢は51.00($SD=1.00$)であった。以下研究協力者をA～Cと表記する。

研究期間 2010年12月～2011年1月。

面接手続き 半構造化面接を行った。面接調査の実施に際し、研究協力者に対して倫理的配慮を十分に行い、理解を得た上で同意を得た。面接場所は対象者との相談により決めた。面接回数は1回行った。所要時間は一人あたり約100分～160分であった。

質問項目 略歴と①自分の子育て経験について：5項目、②子育て支援活動の動機：5項目、③子育て支援活動を通して感じたこと：11項目、④今後の子育て支援活動について：4項目、計25項目を質問し、面接協力者の自発的な語りを尊重し、あらかじめ設定した調査項目で足りないと思われる項目について適宜質問を行った。

分析手続き 分析はKJ法(川喜多, 1967)による質的分析法を参考に、逐語記録した内容をカード化し、発話内容の同じ意図を示すと思われる内容でグループ分けし、ラベリングして、それをカテゴリー名とした。各グループの内容とカテゴリー

名について、心理学を専攻する大学院生2名に評定を依頼した。意見が異なるものについては評定者間で協議し、合意のもとに決定した。

結果と考察

子育て支援活動に参加する子育てを終えた女性の世代性

(a)前の世代から受けたことの語りと、(b)現代に自分がお返ししたい思い・お返ししていることの語り、(c)自分が次の世代から受けると予測していることの語りの3つが世代性として支持された。

(a)前の世代から受けたこと

自分が幼い時に受けたサポート経験や、子育て期に受けた前の世代からのサポートを受けた経験が語られた。過去の子育て期にはサポートを求めている自分、そして現在サポートを求められることを求める自分という時間の経過から、世代性における成熟の過程を支持した語りが得られた。

(b)現代に自分がお返ししたい思い・お返ししていること

前の世代から受けたことを、次は自分が現代にお返ししたい思いと、サポート経験や自身の子育て経験、社会とのつながりを通して現在活動でお返ししていることが語られていた。ここは、まさに世代性を支持する部分であり、次世代へ向けて返報している状態の特徴が見られた。

(c)自分が次の世代から受けると予測していること

現在、自身がそのサポートを受けた経験を肯定的に捉えており、それを返す意味で、現在次世代へ向けてサポートを提供し、それが今後次世代からサポートを受けるであろう自分として、現在の自分が位置づけられていた。

活動を通して得られること

子育てを終えた女性が子育て支援活動に参加することを通して、元々得ようとしている目的が達成されたという実感もあれば、活動をする中で自然に得られたことがあるという実感も語られた。主に、自身の精神的健康や学び、社会とのつながりが得られていた。

世代性における子育て経験の成熟のプロセスの検討

子育て支援活動に参加している子育てを終えた女性の世代性と活動との関係の特徴を以下Fig. 1で示す。

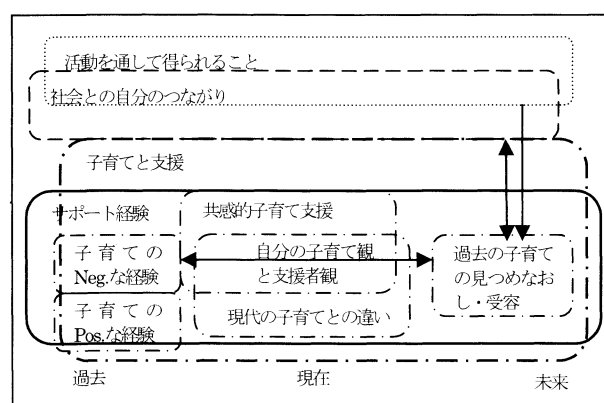


Fig.1 子育て支援活動に参加している子育てを終えた女性の世代性と活動との関係

成人女性は子育てを終えて自らの子育てを活かして社会との関わりを求め、現代の親子との関わりの中で自身の過去の特にネガティブな経験が見つめ直され、得られるものに支えられながら、自分の子育て経験を活かして行動や言葉で語り伝えることで、過去のネガティブな子育てを受容するという過程を経ていることが考えられた。過去の子育てでは必ず受容されなければならないものではないが、これは、次世代の人々の幸福へ向けられ、また、自身が社会とのつながりを求めるという相互に必要としあう中で生じた自己の見つめ直しの経過であり、従来の意味の世代性における成熟の過程といえ、子育てを終えた女性が世代性において多様に成熟していくことが示された。

従って、事前の仮説がほぼ支持されたことから、子育てを終えた女性が子育て支援活動に参加することと世代性という本研究の理論的枠組みが有意義であることが考えられた。

臨床的意義

本研究結果により、子育てを終えた女性が世代性において成熟していくことが示された。このことは、E.H.エリクソン(1950)の述べる従来の意味での世代性が支持され、子育てを終えた女性が子育て支援活動を通して現在や未来、さらには過去までも自分の力で切り開いていき、この時期の女性の世代性が多様に広がりを見せて成熟をしていく過程を遂げると示されたことが自身のエンパワーメントに有効だと考えられる。また、今後の子育て支援の展開にも役に立つ可能性もあるだろう。